

## 特別な支援を必要とする子どもの 卒業後の生活へのスムーズな移行に関する研究

国の動向や調査から、特別な支援を必要とする生徒が、自身の能力や特性、強みを理解した上で、主体的に進路選択し、必要な支援を自ら求めることができることが、卒業後の生活へのスムーズな移行であると考えた。そこで、「自己理解を深める取組」「主体的な進路選択につなげる取組」「進路先への移行に向けた取組」の三つの取組を軸に、高等学校と特別支援学校高等部で実践研究を行った。各学校の実践から、三つの取組を通して、卒業後の生活へスムーズに移行するために必要な生徒の資質・能力を高めることができた。

<検索用キーワード> 特別支援教育 スムーズな移行 自己理解 主体的な進路選択  
支援スケジュール 校内支援体制 個別の相談

### 研究協議会委員

愛知県立一宮起工科高等学校教諭	鈴木 要（令和6、7年度）
愛知県立大府東高等学校教諭	古橋 孝輔（令和6、7年度）
愛知県立碧南工科高等学校教諭（現愛知県立岡崎工科高等学校教諭）	佐野 勇人（令和6年度）
愛知県立碧南工科高等学校教諭	松崎 克哉（令和7年度）
愛知県立名古屋聾学校教諭	三島 宏典（令和6、7年度）
愛知県立豊田高等特別支援学校教諭	辻 望美（令和6、7年度）
愛知県立港特別支援学校教諭	石川 直樹（令和6、7年度）
総合教育センター特別支援教育相談研究室長（現愛知県立しお特別支援学校教頭）	柴田 朋宏（令和5、6年度）
総合教育センター特別支援教育相談研究室長（現愛知県立名古屋聾学校教頭）	荒井 麻里（令和5年度）
総合教育センター研究指導主事（現愛知県立春日井高等学校（定時制）教頭）	伊藤 卓哉（令和5、6年度）
総合教育センター研究指導主事（現愛知県立豊田東高等学校教頭）	三浦千加子（令和5年度）
総合教育センター子ども支援課長補佐	下山 京美（令和7年度）
総合教育センター研究指導主事	水野 司麻（令和5、6、7年度）
総合教育センター研究指導主事	磯貝 大輔（令和5、6年度）
総合教育センター研究指導主事	細澤 美沙（令和6、7年度）
総合教育センター研究指導主事	稲山 紀彰（令和7年度）
総合教育センター研究指導主事	西川 聡（令和7年度）
総合教育センター子ども支援課長補佐	西島 謙一（令和5年度主務者、6、7年度）
総合教育センター研究指導主事	叶井 順子（令和5年度、6年度主務者、7年度）
総合教育センター研究指導主事	小岩めぐみ（令和6年度、7年度主務者）

### 1 はじめに

近年、義務教育段階において通級による指導を受けていたり、特別支援学級で学んでいたりする児童生徒は急増し、高等学校においても発達障害を含め、特別な支援が必要な生徒は増加している。

「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告」（令和3年1月 文部科学省）では、発達障害等のある生徒の中には、大学や企業などの進路先で、環境になじむことが難しかったり、周り

との関係構築がうまくいかなかったりして、中途退学や退職からそのまま社会で孤立してしまう場合があるといった卒業後の課題があると示されている。また、「高等学校における障害のある生徒の社会への円滑な移行に向けた進路指導と連携の進め方等に関する研究」（令和3年～令和5年 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）では、進路先での適応困難につながっていく要因として、「生徒自身の特性への理解不足」「進路先へのイメージのもちづらさ」が挙げられ、高等学校段階において、自己理解を促し、対処法を学びながら自信を高めるような指導や支援を充実させていくことや将来へのイメージを体験や実習を通して具体化することの必要性が述べられている。

特別支援学校高等部においても、進学や就職をする生徒がおり、高等学校と同様の課題がある。

これらの背景から、高等学校、特別支援学校に在籍する生徒が卒業後の進学先や就職先にスムーズに移行するための仕組みづくりが求められていると考えられる。

## 2 研究の目的

特別な支援を必要とする子どもの卒業後の生活が充実するための仕組みについて研究実践を進め、卒業後の生活へのスムーズな移行に資する。

## 3 研究の方法

### (1) 1年次（令和5年度）

アンケート調査と関係機関への聞き取り調査により、研究テーマに関する現状と課題を把握する。把握した課題を基に進路先へのスムーズな移行をするために必要な生徒の資質・能力等を整理する。また、2・3年次の研究実践で使用する自己理解チェックシートなどのツールを作成する。

### (2) 2・3年次（令和6・7年度）

研究協力校（高等学校3校、特別支援学校3校の6校）による研究実践及び検証を行う。本研究では、生徒の進路選択や進路先への移行に関する取組を行うことから、代表委員を進路指導主事とする。

協議は高等学校と特別支援学校のペアで進め、高等学校で行われている特別な支援を必要とする生徒を含めた全体指導の工夫と特別支援学校の個に応じた指導の工夫を互いに共有し、研究の質を高め、実践に生かしていく。

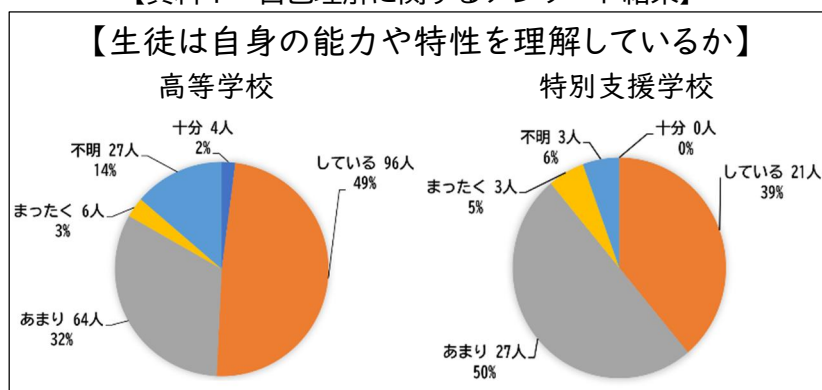
本研究は実践場面が幅広く、担当者間での情報共有と連携が必要であるため、進路指導主事を中心に校内支援体制を構築する。

## 4 研究の内容

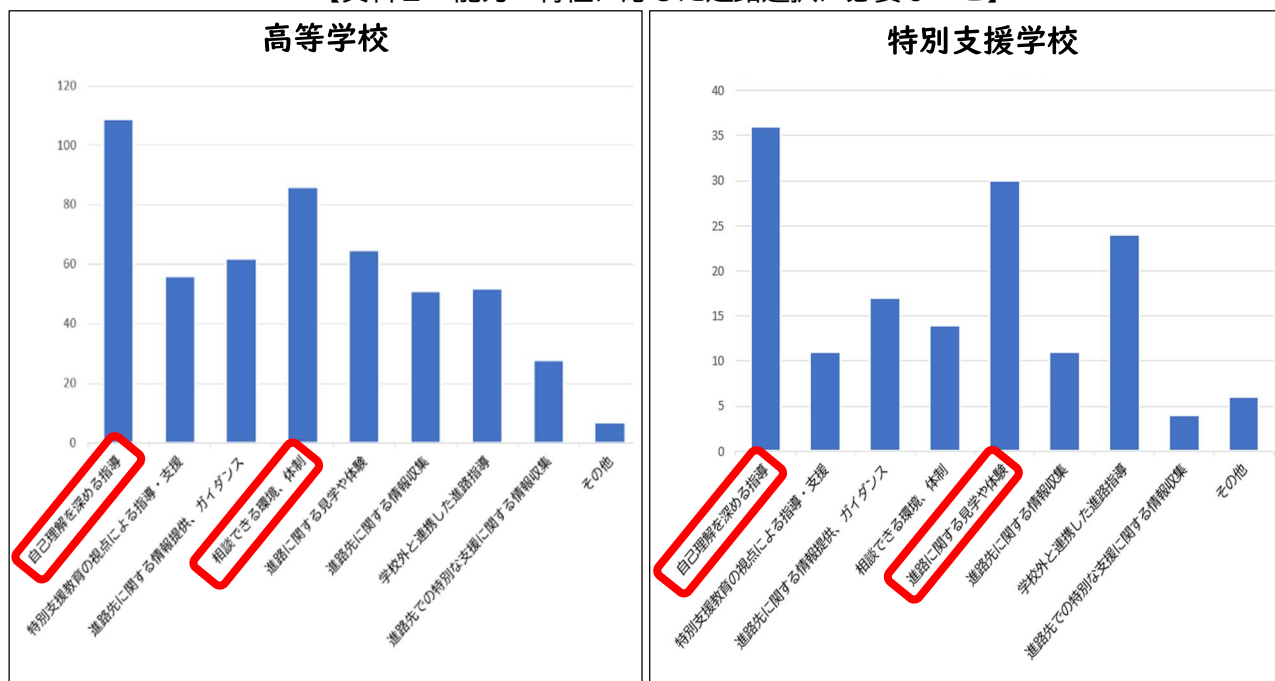
### (1) 教員へのアンケート調査の実施と分析

特別な支援を必要とする生徒の自己理解や進路選択、進路先への移行支援の取組に関する現状と課題を把握するため、教員を対象としたアンケート調査を実施した。集計結果から、生徒が自身の能力や特性を理解できていると感じている教員は高等学校では半数、特別支援学校では約40%であり、半数以上が自己

【資料1 自己理解に関するアンケート結果】

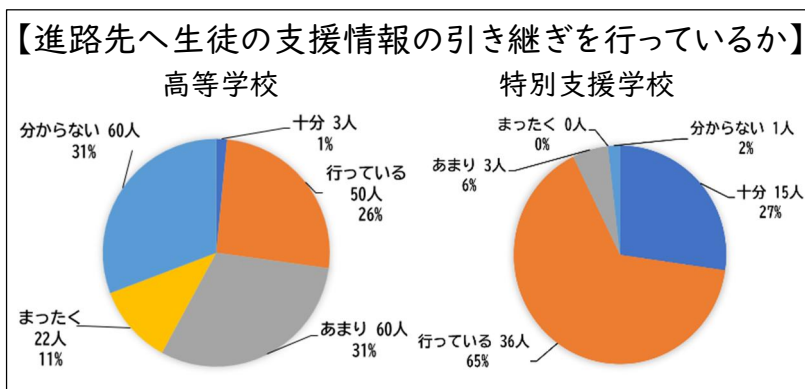


【資料2 能力・特性に応じた進路選択に必要なこと】



理解ができていないと感じていることが分かった（前ページ資料1）。また、資料2にあるように、生徒が能力・特性に応じた進路選択を行うために必要と考える取組について、「自己理解を深める指導」「生徒が相談できる環境や体制の充実」「進路に関する見学や体験」が多く挙げられた。そして、進路先への支援情報の引き継ぎについては、特別支援学校では「十分

【資料3 支援情報の引き継ぎに関するアンケート】



「十分行っている」「行っている」が90%以上でありほとんどの生徒に対して行われているが、高等学校では27%にとどまり、十分に行われていないことなどが分かった（資料3）。

(2) 関係機関への聞き取り調査の実施と分析

進路先における課題を把握するため、大学や障害者の就職支援を行っている事業所を訪問し、聞き取り調査を実施した。愛知県立大学、ヤング・ジョブ・あいち、就労移行支援事業所NotoカレッジキャリアセンターNEXTに依頼した。

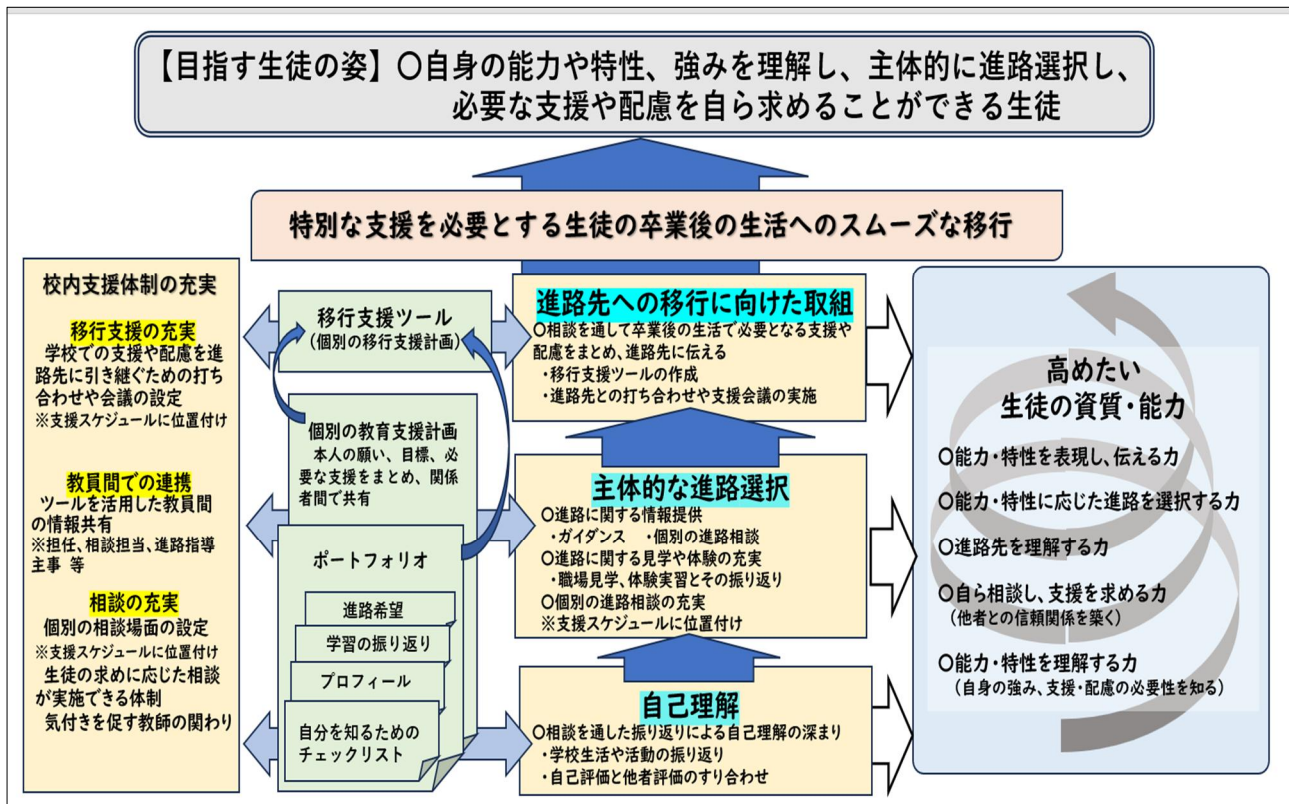
調査結果から、特別な支援を必要とする生徒が進路先である大学や就職先において、困ったことがあっても、自分から相談することができなかつたり、困っていることをうまく伝えられなかつたりすることが課題となっていることが分かった。また、生徒が自身の困難さを整理し、伝えられるようになることや自身のよさや強みを知っておくことの重要性が示唆された。

(3) 高めたい生徒の資質・能力と三つの取組の整理

進路先へのスムーズな移行に必要な資質・能力を「能力・特性を理解する力」「自ら相談し、支援を求める力」「進路先を理解する力」「能力・特性に応じた進路を選択する力」「能力・特性を表現し、伝える力」の五つの力に整理した。これらの力を「自己理解を深める取組」「主体的な進路選択につなげる取組」

「進路先への移行に向けた取組」の三つと結び付けることで、各学校が現状の取組を確認しながら、研究の実践内容を具体化できるようにした。それらを整理し、研究のグランドデザインを作成した（資料4）。

【資料4 研究のグランドデザイン】



(4) 目指す生徒像と研究の仮説

目指す生徒像は、「自身の能力や特性、強みを理解し、主体的に進路選択し、必要な支援や配慮を自ら求めることができる生徒」とした。また、以下の三つの仮説を設定した。

ア 自己理解に関する仮説1

特別な支援を必要とする生徒が、個別の相談等を通して、学校生活の振り返りや自己評価と他者評価のすり合わせを行えば、自身の能力や特性、強みを理解することができるだろう。

イ 主体的な進路選択に関する仮説2

特別な支援を必要とする生徒が、相談等を通して進路に関する自身の能力や特性、強みを理解したり、進路に関する学習や情報提供の充実により進路先の理解を深めたりすることで、自身の能力や特性に応じた進路を主体的に選択することができるだろう。

ウ 進路先への移行に向けた取組に関する仮説3

特別な支援を必要とする生徒が、継続的な相談を通して、自身の能力や特性を理解して、表現し、伝える経験を重ねることで、自ら相談し、必要な支援を求めることができるだろう。

(5) 活用ツールの作成

2・3年次の実践に向けて、自己理解を深めるためのチェックリストとして「じぶん発見シート」と「よいところ・強み発見シート」を作成した（次ページ資料5）。実践では各学校で使いやすくカスタマイズして活用したり学校独自のツールを活用したりした。また、三つの取組内容と高めたい五つの資質・能力等を年間スケジュールに位置付け、整理するために、各校で使用できる「支援スケジュール」の様

式を作成した。

【資料5 活用ツール「じぶん発見シート」「よいところ・強み発見シート」】

**じぶん発見シート** 資料⑤

学校での活動を通して、じぶんについて発見した項目内容に○をつけ、エピソードを残しておきましょう。

年 組 番 氏 名

項目	内容	○	発見日	エピソードMEMO
性 格・ 特 長	明るい性格である			
	温厚な性格である			
	真面目な性格である			
	責任感(正義感)が強い			
	几帳面な性格である			
	整理整頓ができる			
	自分なりのこだわり(ポリシーやルール)がある			
	気持ちの切り替えが早い			
	根拠強い			
	ポジティブ(前向き)思考である			
興 味・ 関 心・ 特 長	一人でいることが好き			
	人と話す(関わる)ことが好き			
	将来の夢(やりたい/やってみたいこと)がある			
	趣味(熱中できるもの)がある			
	好きなもの(こと)がある			
	運動が好き			
	ものづくりが好き			
	手先が器用である			
	想像(目に見えないものを思い浮かべ)力がある			
	職業情報による記憶が得意			
課 業 能 力	授業情報による記憶が得意			
	体調管理(健康維持)ができる			
	朝・昼・夜の食事をとることができる			
	生活リズムを保つことができる			
	よく眠ることができる			
	心や体の調子の変化に気付くことができる			
	不安感への対処法を知っている			
	ストレスへの対処法を知っている			
	食感(舌触り)が気になることがある			
	触感(肌触り)が気になることがある			
感 覚 能 力	周囲の人(の気配や視線)が気になることがある			
	周囲の音や声気になることがある			

**自分のよいところ・強み発見シート**

年 組 番 氏 名

活動(行事)名 \_\_\_\_\_

★下の項目の中から、あなたの「なりたい自分」「見つけた自分」に印をつけましょう。  
※できれば(なるべく)先生や友人と話をしながら、「自分」について考えてみましょう。

よいところリスト	目標 評価 確認
①自分にあったスピード(ペース)で取り組むことができる。	
②質にこだわって取り組むことができる。	
③スピードと質のバランスを意識して取り組むことができる。	
④他者の意見や状況に応じて、考え方ややり方を修正しながら取り組むことができる。	
⑤指示された内容を自分なりに工夫して覚えたり、理解したりすることができる。	
⑥指示されたことを一つずつ、手順や段取りに従って的確に取り組むことができる。	
⑦指示された複数のことを、手順や優先順位を決めて取り組むことができる。	
⑧うまくいかないときや混乱したときに、気持ちを落ち着けて取り組むことができる。	
⑨困ったときに、誰かに相談したり助けてもらったりして取り組むことができる。	
⑩誰かが困っているときに、声をかけたり手助けをしたりすることができる。	
⑪相手の状況や立場の違いに応じた発言や応対ができる。	
⑫割り当てられた自分の役割以外にも、積極的に取り組むことができる。	

【活動に取り組む前に】 実施日 月 日 曜日 誰と: \_\_\_\_\_

★目標あなたは、この活動の中でどのような自分でありたいと思いますか。(○印をつける)

【活動を振り返って】 実施日 月 日 曜日 誰と: \_\_\_\_\_

★評価あなたは、この活動を通して、どのような自分を見つけましたか。  
(目標の自分になれたと思えば○印を◎印にし、新たに見つけた自分があれば●印をつける)  
・「目標の自分/新たな自分」を発見したのはどのような場面や状況でしたか。

★課題あなたは、この活動を通して、どのようなことが自分の課題だと感じましたか。(△印をつける)  
→自分だけの力では解決が困難なこと  
・今回の活動で感じた自分の課題に、どのような援助や配慮があれば乗り越えられそうですか。

【資料6 実践の流れ】

(6) 対象生徒の選出

高等学校の普通科は進学希望の生徒、専門学科及び定時制は就職希望の生徒を、特別支援学校については、聾学校は進学希望の生徒、肢体不自由特別支援学校及び知的障害特別支援学校は就職希望の生徒を各学年から選出し、2年間の実践を行った(資料6)。

(7) 各校の実践

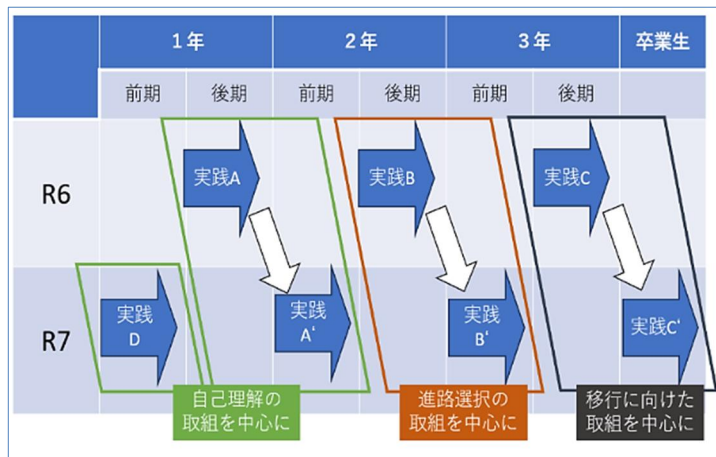
各校の強みを生かしながら、研究の仮説を基に、実践及び検証を行った。

ア 愛知県立一宮起工科高等学校(昼間定時制)

通級による指導と進路に関する学校独自の取組を強みとし、支援の必要な生徒への自己理解シートの活用やSST(ソーシャルスキルトレーニング)による自己理解に関する取組を行った。その上で、職場見学や企業展等などの進路に関する見学・体験、情報提供の取組を充実させることで、主体的な進路選択へつなげていくことができた。

イ 愛知県立大府東高等学校

特別支援教育委員会を核とした校内支援体制を生かして、「ライフデザインシート」や個別の指導計画の作成と更なる活用に取り組んだ。また、校内全体で連携し、支援が必要な生徒の情報を共有して適切な支援をすることができた。支援の方向性を共通理解し、面談や個への支援をこれまで以上に充実さ



せることで、生徒の変容が見られた。

#### ウ 愛知県立碧南工科高等学校

進路シミュレーションや企業研究などの進路行事の充実と、支援が必要な生徒との個に寄り添った面談や相談による支援を行った。実践を通して、自身の能力・特性を理解する力と進路先を理解する力が高まったことにより、生徒が自身の能力や特性に応じた進路の方向性を見だし、主体的に進路を選択していくことができた。

#### エ 愛知県立名古屋聾学校

「じぶん発見シート」等のツールを活用した振り返りや自立活動の指導を通して自己理解を深め、主体的な進路選択につなげたり、学校独自のツール「サポートブック」を作成したりした。自分の特性を他者に説明する取組を通して、自身に必要な配慮や支援について多面的に捉えられるようになり、自ら支援を求める必要性について理解を深めることができた。

#### オ 愛知県立豊田高等特別支援学校

学校独自のツール「自分ノート」を活用し、進路実現へつなげていく取組を行った。3年間継続活用することで、課題や目標が明確になり、目標に向けた課題の改善に主体的に取り組むことができた。また、「自分ノート」を活用した面談を通して、生徒が自分の能力・特性を理解し、それを表現し伝えていく力を伸ばしていくことができた。

#### カ 愛知県立港特別支援学校

校外学習や産業現場等における実習において、「じぶん発見シート」等のツールを活用することで、生徒の自己理解を促すことができた。自己評価と他者評価のすり合わせを丁寧に行うことで自己理解を深め、進路に関して自身の考えを早くから整理し、企業訪問や職業相談等を経て、主体的な進路選択へとつなげていくことができた。

## 5 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

各校の実践から、本研究では次のような成果を得ることができた。

個に寄り添った指導や個別の相談を通して、生徒が自身の能力・特性などの自己理解を深めることができた。また、進路行事の振り返りの充実により、生徒の自己理解とともに進路先への理解が深まり、主体的な進路選択につなげることができた。そして、個別の相談や個別の指導を通して、自身に必要な支援を表現する経験を重ねることで、必要な支援を自ら求めることができた。さらに、校内支援体制を整え、学校全体で組織的に支援や取組を進めることができた。

これらの実践の成果から、「自己理解を深める取組」「主体的な進路選択につなげる取組」「進路先への移行に向けた取組」の三つの取組を通して、生徒の資質・能力を高めることができ、卒業後の生活へのスムーズな移行につながる事が明らかになった。

### (2) 今後の課題

今後の課題として3点挙げる。

1点目は、自己評価と他者評価のすり合わせの難しさである。自己理解の学習の工夫と機会の確保をすることにより、自己評価と他者評価のすり合わせをしっかりと行い、生徒が自身の能力や特性、苦手さと向き合いながら肯定的な自己理解を深めていくことができるようにしていく。

2点目は、実習や進路に関する体験や振り返りの更なる充実である。進路先や卒業後の生活をより具体的にイメージできるようにしていくことが必要である。

3点目は、卒業後の進路先と連携した移行支援である。高等学校では支援情報の引き継ぎが難しい原因として、個人情報保護の観点や本人・保護者が引き継ぎを希望しないことなどが研究協議等で分かった。自己理解を深め、本人が支援の必要性を理解する取組をさらに進めていくこと、また、進路先への引き継ぎを確実に行った上で、聞き取り調査等により卒業生の適応状況を把握するなど、進路先との連携を強化していくことが必要である。

これらの課題の解決のために、校内支援体制を整え、継続した支援や相談を行っていくことが大切である。生徒に身に付けさせたい力を明確にしつつ、「自己理解を深める取組」「主体的な進路選択につなげる取組」「進路先への移行に向けた取組」の三つと個別の相談場面を、3年間の教育活動において体系的に位置付けていくこと、より多くの教員が連携しながら生徒の指導・支援を実施するための体制整備をさらに進めていく必要がある。

## 6 おわりに

高等学校段階は、アイデンティティの確立の時期であり、子どもたちは障害のあるなしに関わらず、自分が何者であるのか、将来どうしていくのか、葛藤したり自分自身と向き合ったりしながら、成長していく。特別な支援を必要とする子どもは、さらに、コミュニケーションや人間関係に困難を抱えている場合があり、特に丁寧な指導や支援が必要である。

今後も各校で実践を継続し、特別な支援を必要とする子どもたちが、自分の苦手さと向き合いながらも、得意や強みを知ること、卒業後も自分らしく生き生きと生活できるよう、本研究の取組が広がっていくことを期待する。

## 参考文献等

- ・文部科学省「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 報告」令和3年1月
- ・独立行政法人国立特別支援総合研究所「高等学校における障害のある生徒の社会への円滑な移行に向けた進路指導と連携の進め方等に関する研究」令和3年度～令和5年度
- ・山口県教育委員会「高等学校における特別な教育的支援を必要とする生徒への指導・支援の充実に向けて（参考資料集）」2021年
- ・非特定営利法人フトゥーロ、LD発達相談かながわ「自立のためのチェックリスト」2009年
- ・独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構「就労支援のための訓練生用チェックリスト」2009年
- ・菅原伸康, 関西学院大学「支援ニーズのある高校生のセルフアドボカシースキル向上プログラムの開発」令和2年度～令和6年度